

中野香織

「ファッション歳時記」

108

危機下での「服装の価値」



『婦人画報』(ハースト婦人画報社刊)1944年7月号より(撮影=箕輪 修)

新型コロナウイルスがもたらした諸影響によって、旅行業界、飲食業界とともにアパレル業界も大打撃を受けています。老舗大手の倒産もさることながら、ニュースに上らない倒産も相次いでいます。東京・青山や表参道の裏通りを通るたびにショップの閉店が増えていることに気付き、半年前のおしゃれなにぎわいが別世界の出来事のように思いつき出されま

す。世界がこんなにも急速に姿を変え

性の戦後のファッションの歴史を執筆する機会をいただきました。資料として第二次世界大戦中に発行された婦人雑誌を読んだのですが、今以上に殺伐とした危機のさなかであった1940年代の前半、戦争中であっても婦人雑誌は刊行され続け、ファッション情報が絶えてい

なかつたことを知って、衝撃を覚えました。

ただ、雑誌は発行され続けているとい

くのですね。年々、切迫した命令調が増

えていくというか、時代情勢の急速な変化が、明らかに映し出されていました。

た例えば、41年4月号の誌面には、も

んべの種類とその美しさの解説があり

ます。「もんべは山袴のひとつである」と

いう定義に始まり、系統別に8種類の

もんべの写真が掲載され、その詳細がど

こか衛学的に説明されています。さら

に、「都会ではくためのもんべ」の注意事

項まで。手縫いのもんべであってもTPO

に応じて美しく着こなすことが指南さ

れていたのです。つまり、少し余裕があ

りました。

ところが、44年7月号になると、ト

ーンがかなり変わってきます。「真夏の完

全防空服装」と題された特集には、「美

ということばが出てきません。「その日、

その日が決戦である今日、夏だから、暑

いからと云って防空態勢にゆるみがあつ

てはならない」という訓戒のもと、具体

的な防空服の整え方が写真や製図と

にも指示されます。

なかでも目がくぎ付けになってしまっ

たのは、スカートをズボンタイプの防空

服に変える方法の解説です。スカートの

前後の中央にスリットを入れておき、裾

口にもを通し、いざというときには片

足ずつ引き絞ってズボンにするという仕

掛けです。「これからの服装は、すべて防

空への何らかの用意なくしては服装と

しての価値が半分になると思わねばな

らぬ」という強い語調に時代の厳しい要

請を感じ、涙を禁じませんでした。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「イノベーター」で読むアパレル全史(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。

戦時下の記録を現代まで残してくださった先人の功績に感謝しつつ。